ラシーヌ研究……(I) 悲劇性について

浅野富美子

(1)

Racine が《Britannicus》や《Bérénice》の序文で示した様な傲慢さと，烈しい毒舌とで，彼という人を考えていた私は，書簡集を読んでみて，最初一寸奇異な感じに打たれた。というのは，其処には何時も，人々に対する優しい配慮と，物事を極めて実際的に処理する人の持つ，充分な落着きが見出されたからである。例えば，オランダに駐在していた長男宛の，細々とした注意の手紙などは，その典型的なものだが，特に死の前年，自分の病気を心配させまいと，気を配った数々の手紙は，心を打たずにはおかないものである。

「……殊に，私の健康について心配しないようにしておくれ，実際とても丈夫なのだから」(1698年5月2日　Jean-Baptiste 宛)

「私の病気は重いものでした。けれど，何もお前を欺していたわけではなく，あの時危険はないと報らせたのは本当にそう医者から云われていたからだと思ってくれていいのです。お前が此方へ来なかった事，とても嬉しく思っています。ほんとにそれは無駄だったし，大変な負担になる上，お前が大使閣下の許で進んでいる道からそらせてしまう事になったでしょうから。」(1698年 Jean-Baptiste 宛)

これ等の手紙は，かって Boileau が病苦を訴えて，「もう声が返って来ないなら，この世を捨ててしまおうと，私がどんなに決心していたにしても，御手紙ですっかり気分が改まりました。つまり一言で云えば，私はもう何もかもから離れてしまえると感じています。貴方を除いたら。」(1668年8月19日 Racine 宛) と云った激越な調子と対照する時，Racine が，時には誰よりもよく自分を規制し得た事を知って，意外の感を深くするのである。

それではやはり，彼の作品の，あの情念の烈しさは，時代に適応する芸術家の作り事に過ぎないのだろうか？　だが，当時の凡ゆる他の作家との比較も，主題の検討も，彼の悲劇の独自性を解き尽す事は出来ないと，Mornet は云っているではないか。歴史の背景の中に，時代の環境の中に，その作品をおいて検討した後にも，やはり Racine 悲劇の，あの説明し難い独自性は残っている。これ程の優れた作品が作家の魂の介入なしに作られる事はあり得ないと，Mauriac と共に確信しながら，私は Racine 悲劇の中に，一人の個性から生れたに相違ないような，際立った考え方を求めてみた。そして又，Antoine Adam や，René Jasinsky の様に，他から規定された外界を，そのまま作品の人物に当てはめるのでなく，むしろ Racine という一人の人間に即する様に努め乍ら，彼がその時代の中に生活しつつ得たに違いない，一つの考え方，を見出そうと試みた。

この様にして Racine 悲劇という一連の作品を一方に考え，今少しの注意を以て書簡を読み返してみると，この平静さの下に，この規制ある行動の下に，休みなく続けられてい

た精神の努力を，瞭然(アリアリ)と見る事が出来たと私は思う。つまり，彼の悲劇を一貫している一つの考え方が，これ等の書簡をも一貫して流れているのであり，私達はその事から逆に，Racine の悲劇が，独特な一つの考えに支えられたものだという事，そしてそれこそ，この類い稀な精神が，自己と社会に真面目に対決して得たものに他ならないという事を，確言出来ると思う。この小論は書簡を通じ，又，作品を通じて，この魅力ある存在を証言し，それが如何に生きるべきかという問に答えてくれるのを聞くためのものである。

(2)

Racine 悲劇は，当時劇界を支配していた Corneille その他の悲劇とは，全く別な劇の理念によって書かれている事に先づ注意しなければならない。単に変愛を中心にしたという事でなく（既に之は当時の流行であった），この無名の青年は，Corneille が悲劇の支柱としていた「二者択一」の Coup de théâtre に真向から反対する事によって，真に Racine 悲劇と呼ばれ得る作品の幕を切って落したのである。彼は，《Andromaque》に於いて，主人公を先づ一つの拘束の中に置く事で，その独特な悲劇感の創造を始めた。一見したところ Andromaqne は，Corneille の Rodelinde (“Pertharite” の女主人公)の様に，名誉と子供との二者択一を迫られ，それが劇の中心となっているかの様に見える。然し，この二人の女王の situation は，全く異る理念から異る効果の為に作られたものである。Rodelinde の場合，名誉と子供とが正に両手に計り得る異る ordre に属しているのに反して，Andromaque は，亡き夫 Hector への愛と，その「形」である子供という，畢竟一つのものしか持ってはいないからである。

Ce fils, ma seule joie et l'image d'Hector ! (1016)

Ce fils, que de sa flamme il me laissa pour gage ! (1017)

彼女が Pyrrhus を拒むのは，今もなほ感覚を通して活き活きと蘇える Hector への愛の思い出の為であり，その愛の，残された「形」である子供との何れかを選ぶ事は不可能であるのみでなく，選ぶ事など一度も問題になっていない。彼女が，どうする事も出来ない不幸の中で，どんなに苦しむかが問題なのである。この様に，主人公を，運命の小さな環で囲む事，これが Racine が初めて自分の idée に相応しいものとして与えた最初の形であり，彼の悲劇感の第一の鍵である。

この「形」は，《Bérénice》に至って，純粋に完璧につくりあげられた。《Bérénice》には，同じ主題で同じ時期に発表された Corneille の《Tite et Bérénice》という作品があって，種々興味深い問題があるのだが，私が心を魅かれるのは，この二つの作品には，それぞれの作家の，根本的な考え方の相異が最も簡明に示されていると思うからである。主題を簡単に述べると，Rome の皇帝 Titus は，Palestine の女王 Bérénice を愛して結婚を望む程であったが，外国人や，他国の王を，皇后にしてはならぬという掟の為に，malgré lui, malgré elle に二人は別れた，というのである。

二つの劇を比べてみて，最も面白い点は，Rome の掟の扱い方の相異にある。Corneille では第五幕大団円に於いて，Rome の元老院が，逆う事の出事ない筈の掟を捨てて，Béré-

niceを皇后に迎える事を決定し，又，Titeも，それより先に自分の自由な意志でBérénice と結婚しようと決意する。それにも拘らずBérénice は自分に名誉を与えてくれたRome の為に又 Tite への愛のために，自らそれを断わって去ってゆくのだが，Rome の掟が変り得るというこの前提は何を意味するのだろうか，私はそれこそ Corneille が，彼の劇の本質からして，彼の思想の根底からして，とらなければならなかった前提だったのだと思う。つまり，人間が凡ゆる苦しみにも拘らず，自分の意志によって正しい道を選ぶ事が出来るところに，人間の自由があり，人間の価値があるなら，外からの強制なしに自分の道を選ぶ事の出来る situation が先づ必要な筈である。だからもし，Rome も Tite もBérénice 追放を決めている時，彼女が去ってゆくとすれば，それは選択ではなくて，諦めにすぎないのである。Corneille が人間の意志の英雄的な行使に，その劇的感動の凡てを托した時，どうしても Rome の掟の可変性が必要だったのだと云えよう。(P.ex.715) そして又，劇全体が次々と起る二者択一のCoup de théâtre によって昂められてゆく限り，実際にそれぞれの選択によって変り得る未来が必要だったのである。

さて，この事を頭において Racine の Bérénice に戻ろう，Racine は劇の中で，Rome の掟が変り得るという事を一度も仮定していない。Rome が Bérénice を受入れるという事は，彼には「真らしくない」と思われたであろうし，「Corneille の惨めな作り事」と思われたでもあろうがその可能性の是非よりも，Racine に必要だったのは，Titus の意識の中で，掟が変り得ないものとして受入れられているという事だったのである。Titus にとって Rome の掟が何故動かしい難いものと思われたかをRacine は Titus 自身の言葉で，充分に説明している (acte IV, scène 4)。更に Titus は，自分がそれを守ってBérénece と別れねばならぬ事を運命として受入れている。この「運命として受入れている」という事が，Racine の Titus にとって二者択一のあり得ない理由なのだが，之に就いて少し述べてゆきたい。

Racine の劇で Titus が最初に登場した時，彼は既に Bérénice との別れを決意している。彼は confident に，国民の意見を尋ねるが，それは自分のこの決心を確かにする為だったと話している。然し，この決心という言葉は，Corneille の主人公達の採る決心とは異る事に注意しなければならない。例えば Corneille 劇の初めの方で Tite が次の様に述べるところがある。「一度意志が打克ったからといって，もう安心という事はない。あの時の苦しさを思えば二度目はもっと怖しい」(acte II) 即ち，決心は一瞬毎に試され，新たに撰択されて維持されねばならない。つまり一瞬毎に撰び直される事，それが決心を意志によって維持するという事である。従って自由な意志による撰択は，何時もその理由を，活き活きと自分自身の中に確保していなければならない筈である。そうでなければ一度した決心は一種の情念になり，その人にとって一種の運命になる。

Racine の Titus は，自分の中に，「掟」の方を撰ぶべき理由，あるいは撰んだ理由を全く持っていない。彼はこの掟を，唯，Rome 人の外国に対する憎しみとして理解している。confident が彼を慰さめて，保たれた名誉を賞讃した時にも (IV, 6) Titus は悲しげにしかし明確な意識を以て，「Non, Je suis un barbare」(1212)

と語るのである。掟に何の理由も認めたわけではない。而も猶，掟が動かし難い事もよく承知している。だから Rome の掟は，彼がそれを認めた日から，運命として存在しているのである。それ故 Titus は，掟を撰んだ理由は一度も述べないで，ma destinée と呼んでいる (715)。こうして Bérénice との別れが，不可避なものとして Titus の意識の中に受入れられている事，之を Racine は，非常に重大に扱っているのである。之こそ，この悲劇を形づくる第一の要因なのであるから，Titus が初めから別れを決意していると云って非難するのは，見当外れと云うべきなのである。

Racine は，こうすることによって，主人公 Bérénice の前に，破局迄の唯一筋の道を，予めひいたのである。此処で，Bérénice が皇后の位も名挙も望んでいるのではなく，唯，Titus の愛のみを問題としている事を想起しよう (575)。彼女は，皇帝の地位も，掟も，認めようとはしない。彼女が見ようとし，知ろうとするのは，Titus の意識だけであり，最後に彼女が自分の運命を見るのも，Titus の意識の中になのである。それだからこそ，Titus の心の中で，Rome の掟が運命として存在した時，Bérénice の辿るべき一筋の道が，既に決していたと云えるのである。この様な劇では，人物間の複雑な変化があり得ないのは明らかであり，Racine が，Corneille とは，全く別な道を歩もうとしているのだという事を示している。さて，自分の生きるべき時間の先に，不可避な運命を見る事によって，悲劇の生が始まるのであるが，之に就いて少し述べなければならない。Racine 悲劇に於ける運命という意味は，普通ギリシヤ悲劇に見られるようなものとは，趣を異にすると思われるからである。ギリシヤ悲劇では，人間を遙かに超えた巨大な力が劇を支配していて，人間がそれを知ろうと知るまいと，運命は，その力強い足音を響かせている。足音を聞くのは観客の方である。之に反して，Racine 悲劇では，運命は寧ろ登場人物の心の中にある。彼等が或事を不可避と感じる事によって，事実それが彼等にとっての運命となってしまうのである。私は既にその例を Titus に見たが，このように Racine 悲劇では，登場人物の心の中にある限りに於いて運命が存在するのだから，Bérénice のゆく手にひかれた一筋の道は，Bérénice 自身にとっても少しづつ明らかになってゆかねばならない。つまり彼女にとっても運命として現われて来なければならない。いわば人が運命を知る事，自分のおかれた位置を知る事，はっきりと誤りなく知る事，この知るという事に，Racine は凡てを賭けたのだと云えよう。

この場合，運命を知るとはどういう事だろうか？ それは Bérénice にとって外側にあった事実を，運命として意識の中に入れるという事である。そしてそうする事によって，その事実は，彼女にとっても回復する事なく不可避な運命となるのである。それ故，劇の主題が Bérénice にあるという事は，云いかえれば，劇の行われるのは，今や劇の始まろうとしているのは，Bérénice の意識の中なのだという事に他ならない。最初 Bérénice は，Antiochus から Titus の決心をきかされた時，真実を拒否し，認めまいとし，次いで之を変えようとし (Titus への訴え)，次いで之を逃れようとし (死によって)，最後にはっきりと，之を見て受入れる。この様に全体が，Bérénice が運命へ近づいてゆく一歩毎の意識の過程なのだが，最後に第五幕で，Bérénice は，死ぬべく決意しながら出発しよう

として，それも Titus に見破られてしまう。Titus は，彼女が生きる事を約束しないならば，自分も命を絶つと云う。こうして遂に Bérénice は，自分のおかれた，この動かし難い状態を認識するのである。Titus は自分を愛している。今はそれは確かな事になった。だが Titus の心の中で，Rome の掟は運命として存在している。彼は彼の生命を滅ぼす事は出来ても，この掟と戦おうとはしないだろう。それ故 Titus の愛の在り方と，Bérénice の愛の在り方とは，全く違っていたのである。二人の間には，愛し合っていながら，無限の距離があったのである。然し，彼女は Titus の愛の在り方を受入れ，それを許した。唯，間違ってならないのは，彼女が Titus を理解し受入れたという事が，この無限の距離を埋めたのではないという点である。愛を契機としてではあれ，Bérénice がこの運命を見て受入れたという事は，彼女が自分の孤独を受け入れたのに他ならないのである。二人だと思っていた世界に，実は自分一人でいたのだと発見した後に，それでも Titus の生き方を許したのである。この別れは，Titus からの別れであると同時に，愛そのものからの別れなのである。この劇の最後には，Corneille に見られた様な，何の希望も約束もない。

Tout est prêt. On m'attend. Ne suivez point mes pas. (1505)

という台詞は，この事をよく示している。

以上の検討によって，Racine が，劇の本質を，人間の意志の決定と行動の様々な関係にではなく，個々の人間の内部へ，意識の歩みの中へ，移してしまったのだという事を，私達は見る事が出来たと思う。Bérénice は，その事の典型的な，又極端な例であるが，この situation は，他の作品の凡ゆる場合に見られるものである。小さな運命の環の中で，破局へ向う一歩毎の意識の歩みに，悲劇的な感動をおいた事が，Racine に独自な悲劇感の本質をなすものである。

この運命感の内容を，もっと詳しく理解する事によって，私達は Racine 悲劇の第二の鍵へ到達する。もう一度《Andromaque》に帰って，他の三人の主人公に注目してみよう。Oreste は幕の初めで抵抗を放棄して以来，感情も行動も，Hermione の気紛れのままに左右されている。その Hermione も又，Pyrrhus の心の動きのままに期待と絶望を繰返し，そして又 Pyrrhus も Andromaque に結びつけられて，主人公の凡てが自由に行動する事が出来ない。之はよく指摘される事であるが，この事は，「彼等にとって運命となるものが，他の人間の気紛れ，情念に過ぎないのだ。」という事を示している。運命はギリシヤ悲劇に於けるように，人間や神々すら超えた巨大な力ではない。大地に響く神の意志ではない。唯人間の心理の動きにすぎないのだ。Racine のこういう考え方は，例えば彼がギリシヤ語原典を読む場合の態度にも，判然と現われているものである。Racine の読んだギリシヤ語原典は，かなりの範囲に及び，1655年（Knight の推定）以後，各種の Textes に註を残しているのであるが，《Iliade》の様な叙事詩を読む場合にも，彼は，大地の上に起り大地の彼方に過ぎ去ってゆく事件の物語よりも，事件が人々に与える細かな反応を——人間の行為そのものよりも，人間の心の動きを——好んで知ろうとしている。例えば，Troie の人々が，城壁の上に腰かけて，遙かに戦場を眺めている部分でも，Racine が最

も興味を魅かれたのは，Hélène の心理らしく，

「(Vers 172—175) Elle ne nomme point son mari devant Priam, comme étant amoureuse de Paris, son fils.,」

という類の，細かい分析の註を入れている。更に之等の Textes の中でも，Eschyle, Sophocle, Euripide の悲劇に附された註は，もっと明瞭に，この事を知らせてくれる。そこに，Racine の一貫した態度を求めると，大略次の二点になる。①人間の心理がどのようにして，事件の原因になるか，又，事件を契機として人間の心理がどう動くかのみを，主に，追求しようとしている事，②その結果ギリシャ悲劇に於いて，大きな意味を持つ超自然の力，人間の心理を越えた事件の必然性が，等閑にされ，その為，劇の解釈に小さな誤りさえ見られる。一言で云えば Racine は，事件の原因に，人間を越えた運命の力を決して見ようとはせず，どんな不幸も，凡て人の心の動きの中に，その理由を持っているのだと考えて，劇を見ているのである。之は，Racine が，ギリシャ悲劇を modèle として，《Iphigénie》等の劇を書いた時，よく示される事であるが，全く個人的な読書に於いて，彼が既に此の見方を持っていた事は，それが単に時代に気に入る為のみでなく，Racine 自身の考え方から由来したのだということを物語っていると云えよう。

一方，「運命は人間を超えた力ではなく，人の心の動きにすぎない。」と考える事から，ギリシャ悲劇を貫いていた人間同志の連帯感は失われてしまった。Racineの《Iphgénie》では，Calchas の予言は唯人々の心理の動きの契機としてのみの意味しか持っていない。例えば，Clytemnestre は，Agamemnon が娘を犠牲にしようとするのは，唯自分の野心の為だと解釈して，烈しく夫を非難する。

Tous les droits de l'empire en vos mains confiés (1291)
Cruel, C'est à ces dieux que vous sacrifiez, (1292)

娘を奪われようとしている両親の間にさえ，この様な孤独と敵意が存在しているのである。又実際 Agamemnon 自身，Calchas の予言を怖れるのは，それが兵士達に与える影響の為であり又その兵を指揮する権力への執着の為である事を密かに告白している。

Moi-même (je l'avoue avec quelque pudeur). (80)
Charmé de mon pouvoir, et plein de ma grandeur. (81)

之を，Euripide の，両親の歎きと比べると，この事は一層明かになる。

Agamemnon : ô destinée vénérable, ô Fortune
ô Génie attaché à mes pas !
Clytemnestre : Aux miens aussi, aux pas de cette malheureuse enfant : le même
Génie nous poursuit tous trois de sa colére.

又，Euripide の Iphigénie が，

Vais-je, mortelle, entraver les desseins d'une déesse? Va, c'est impossible.
Sacrifiez Iphigénie, allez détruire Troie !

と，運命の力への諦めと，ギリシャ民族の為に，犠牲になろうとするのに反して，Racine

の Iphigénie が，自分の運命を見るのは父の心の中であり，彼女の犠牲の決心も，父への愛の為である。

Quand vous commenderez, vous serez obeis (1176)

Ma vie est votre bien, Vous voulez le reprendre (1177)

そして此処にも又，Bérénice と同じ様に，自分の愛するものの中に，愛するが故に，その人の意識の中の「運命」を，運命として受入れる主人公が見出されよう。

さて，第三の，Racine 悲劇を最も独創的にする鍵が既に《Andromaque》に於いて見出される。他人が自分の運命である事に耐えられぬ傲慢な三人の主人公に注意しよう。彼等は，他人に自分の心を支配され，苦しめられる事を，何と口惜しがっている事であろう。この屈辱の思いに深く傷つけられ乍ら，彼等は，ひっそりと自分の心をのぞきこみ，いわば，自分自身と対面する。そして，Racine が《Phèdre》に於いて，完全に昇華せしめた，あの命題を発見するのである。他人の情念が運命となるのは，自分自身が，自分の情念に打克てないからだ。「自分の情念こそ，自分の運命なのだ……。」

第一幕の初で，Oresteの物語る長い旅の物語は，この内なる運命との戦の歴史に他ならない。

「友よ，君は海から海へ，この鎖と苦しみをひきずって来た僕を知っている。…日毎，自分自身から，自分を救い出し乍ら…。」(46)

「之程の努力の末に，抵抗が空しかったのだから，もう僕をひきずる運命に，目をつぶって身を委ねるのだ。」(97—98)

情念の力が余りに強かったので，Oresteはもうそれを運命としか思えなかったのである。そして彼は，今はそれを受入れたのだから，情念の導くままに，どんな事にも向うであろう。

Racine悲劇の主要な美しい場面，いわゆる Dialogne sourd の場面で，主人公は凡て外の世界から隔絶され，自分の内部へのみ目をむけ乍ら，内なる運命と対い合うのだが，その美しさを支えるこの悲劇感は「情念という運命」に抵抗する精神の存在を仮定しないでは理解出来ないものである。何故なら人は，自分の力の及ばぬものを，諦めを以て運命と呼ぶが，然し何等の抵抗を感じないで喜んで選んだものを，運命とは呼ばないからである。だから，私達が此処で出会うのは，いつも自分自身の情念からの不羈を切望しながら，それを運命と認めずにはいられない精神の存在なのである。例えば，Hermione は，愛されないという屈辱の中に，なお綿々と留まっている自分を何と情なく思っている事だろう。

「私の今いる状態を自分で知るのが怖ろしいの。御前に見える凡ての事，どれも信じないようにしておくれ，私はもう愛していないのだと信じておくれ，私の勝利を賞めておくれ，そして，ああ，出来る事なら，私にもそれを信じさせるのだ。」(第二幕第一場)

Racine は，この煌めく精神の，情念に対する戦を捉える事によって，そこに悲劇的な凡てのものを見出したのである。この「内なる運命」に対する精神の認識の歩みの上へ，劇の凡ての構造を結集せしめる事によって，Racine は，あの素晴しい悲劇を創ったのだ。

この様に考える時，Racine が作中人物に与えた，あの lucidité には，今迄考えられて

いたよりも，もっともっと強い意味を与えなければならないだろう。Corneilleの主人公も，lucideに自分の心を見る事が出来る，然し，それは，判断する為であり，選択し，行動する為なのだ。Racineの主人公は，既に何もかも終ってしまった時，そして又行動の不可能な時，明晰な，絶望的な，分析を始める。この誤りない分析だけが，精神の残された力であるかのように，……だから此処では，lucidité は，精神の抵抗の記録であり，意識の舞台での劇の action そのものなのだ。劇の正に行われるのは，人物の心の中なのであり，Racine悲劇の人物が，自分の中をのぞき込んでする，仮惜ない分析の一歩一歩が，悲劇を形づくっているのである。

この場合，内部を描くとは，叫ぶ事によって情念を昂めるあの告白文学とは異り，此処で最も重大なのは，他人の身振りをじっと凝視める様にして，自己の情念を凝視め，情念そのものを自己に外的なものとして扱おうとする事である。そうする事によって，熱や渇きのような，一つの混濁した感じでしかないものに，出来るだけの順序と明晰さとを与え，それによって精神が，王者としての地位を回復しようと試みるのだからである。「情念は運命だ」と，告白する事によって，Racine はこの戦を敗北的にしか捉えなかったのだが，自己の情念を説明し得る力，この「運命を認め得る力」は，Racineの信じた唯一の武器である。情念に打克って行動を支配する事は出来なくても，せめて自分の置かれた地位を誤りなく知り得るというのは，やはり精神の一つの力なのだ。だから Racine 悲劇にあっては，自己の情念の描写が，一つ一つ精神の抵抗の確証であり，その存在証明だと云えよう。

Racine悲劇が一つの頂点に達した《Phèdre》に於いては，情念は勝手に生きて動く怪物のようなものとして描かれている。全く善悪の判断や制止を受付けぬ，巨大な，物の世界に属する強力な動きとして表現されている。この事は，裏返して考えれば，それを凝視める精神が，この物の世界とは，はっきり切離された，驚くべき純粋さで捉えられているという事である。精神にとっては，肉体も又，大自然と同じ物質に属する異質なものだという事である。

精神のこの純粋さと同時に，それが自己の支配の及ばぬ外的な巨大な物質界に，いわば閉じこめられているのを，Racine は，比較も及ばぬ恐怖をもって知ったのである。海の波が私達を襲う時，どうしても，この宏大な水の怒濤から外へ脱れ出る事が出来ないように，精神は，このわけのわからぬ肉体という自然の外へ，どうしたって脱れる事は出来ないのだという事を，Racine 程の怒りと絶望を以て感じた人はない。

そして，この，情念という，自己の力の及ばぬ肉体の動きが，その怖しさと醜さが，描き出されれば出される程，そこには逆に，この牢獄を脱れ出ようとする精神の，透きとおるような，自由への，光への憧れが，いよいよ煌めいて現われるのである。《Phèdre》の美しさは，この二重の表現の美しさである。

以上の様に，《Andromaque》に於いて，若き Racine が悲劇とは何かという問に，独特な答を与えた時，《Phèdre》で結実する彼の悲劇の全体系が既に出来上っていたのだという事が出来る。そして創作時代を貫く，この考え方は，又，Racine の実生活を支える大きな idée だったのだという事を，私達は今度は書簡その他を通じて，見てゆく事にし

よう。

(3)

Racine が，《Britannicus》の不評を，Corneille 一派の策謀の結果だと思いこみ，Corneille を始め批評家達に，烈しい毒舌を浴せたのは有名な話である。

「無知な人間程不正なものはない……自分がesprit を持っていると思われたいばかりに，(劇の)一番素晴らしい箇所でも平気で攻撃する。そして，一寸でも意見に逆らおうものなら，誰の云う事も訊かない思い上りものにされてしまうのだ。」(Ier Préface de Britannicus)

之は，Racine の傲慢と自尊心の例として，よく挙げられるが，この事はもう一つ，彼が相手を情念のみによって動く不正な存在として捉え，相互の理解の可能性を，予め断ち切ってしまった事を，よく示している。

人間の判断を，情念の気紛れに左右される不確かなものと考えるのは，一見当然な事のようであるが，然し，晩年の Corneille が，自作の不評を気にして，一作毎に examen を書き，規則に合っているかどうかを点検した事実を思い浮べるなら，又，Boileau が敵の批評に対して，

「彼等が私の欠点で，私をやっつけようとするのなら，私はそこから立直って，それで云い返しが出来るのだ。彼等の意見をよく聞いて，私の誤りが直せるのだ。こうして意地悪な彼等の怒りから，こっちの利益を抽き出すのだ。」(Epître à Racine)

と云ったのを思い浮べるなら，此処には又，全く別な，考え方の ordre がある事に気が付くであろう。

Corneille の examen に現われた，謙虚な弁護の態度と，飽くまでも相手の理性に訴えて説得しようとする，人間相互の共通の規準への信頼は，Racine には無縁だったのである。Racine は他人を考える時，自分をも相手をも超えた永遠の正しさというものを，一切認めてはいないようである。その様な規準を，初めから否定して，他人との関係を，押したり押されたりの，いわば物質的関係に突戻す事が Racine の生涯の行動原理になっている。例えば，1661年11月11日，22才の時の，La Fontaine 宛の手紙には，

「戒律厳しい人々と一緒の時は，きちんとしなけりゃなりませんから。…君や連中の狼達と一緒の時は，僕も狼だったようにね。」

と書いているし，晩年，大貴族達から受けた多くの庇護の理由を，長男に説明して，

「私の才能は，私が espritを持っている事を，あの人達に感じさせる事ではなくて，あの人達がそれを持っていると悟らせてあげるところにあるのだ。」と，述懐している。

之等の Racine の生き方の根底には，人間というものは，凡て自我中心主義の，極めて情念的な存在に過ぎないという，強い特徴的な考え方がある。この考え方が Racine の作中人物の性格を貫くと共に，Racine 自身の処世の基礎となったのである。そして斯様に，人間を最も低い点で捉えた事が，Racine を，誤りない心理家にしたのに違いない。何故なら，理性や信頼を否定する事から，「自分の運命となるのは，他人の情念に過ぎぬ。」という考え方が，直ちに現われてくる。そうだとすれば，自分の凡てを左右する他人の心理

を，幻影なしに知る事は，社会に生きる上の最も大きな必要となるからである。

Adam や Jasinsky の研究によれば，宮廷での冷酷な観察が，Racine の幾多の作中人物を齎したという事であるが，事実1692年の，Boileau 宛の手紙は，彼等の収入が何時も，王側に於ける煩わしい駈引や請願によって確保されなければならなかった事を示している。

「今朝，Maintenon 夫人が報らせてくれましたが，王は，私に4000フラン，貴方に2000フランと，手当を御定めになりました。…王と，それから夫人へも，一筆礼状を書かれるように御薦めします。」(1692年4月8日)

「御手紙（王と夫人への）に注意書をして送り返します。注意は，御好きなように役立てて，御手紙を直して，6時迄に又此方へ届けて下さい。欲を云えば5時半より前，王が夫人の許へ行かれる前に御渡し出来るように。……。」(同4月11日)

この様な Louis XIV の宮廷で，Racine が一介の孤児から遂に，王の最も有力な側近にまで，のし上ったとすれば，それは甘さの微塵もない人間観察によってであり，人間不信を基礎とする心理家の才能によってなのである。だから Racine は，趣味で心理の研究をしたのではない。「知れ，然らざれば滅びよ。」の厳しい必要に迫られ乍ら，Racine の生涯は，彼に何時も目覚めている事を，誤らない事を要求したのである。

一方，人間を情念的存在として捉えた時，だからと云って Racine は，他人の評価や悪意を恰度石ころや水の流れのように，自分の心の独立とは無縁なものとして，切離して考える事は出来なかった。

「ほんのつまらない非難が惹き起す苦しみの方が，全ての賞讃が齎す喜びよりも，私にはいつも大きいのだ。」

という告白をまつまでもなく，Racine が自分で親友へ報らせた次の挿話は，之をよく示している。

「J'y 〔au lever du Roi.〕 ai treuvé Molière, à qui le Roi a donné assez de louanges, et j'en ai été bien aise pour lui: il a été bien aise aussi que j'y fusse présent.…。」(1663年11月 L'abbé le Vasseur 宛)

Racine 程，“情念にすぎない”他人の注目を希い，他人の愛情を求めた人間はなかったのである。Racine の「嘲笑的な，焦々した，嫉妬深い，傷つき易い気質。」(Boileau 評) は，誰よりも，彼自身を苦しめたに違いない。他人の批評を情念にすぎないと見ていただけ，それによって風のように揺すぶられる苦しみから脱れたい希いは，一層強かったに違いない。

彼が生涯の第一歩を始めた頃の手紙に，既に私達は，彼の精神の苦痛を見る事が出来る。

「Vous voyez que je suis à demi courtisan; mais, c'est à mon gré un métier assez ennuyant。」(1663年11月 L'abbé le Vasseur 宛)

死の前年にも，Racine はその長男に訴えて，

「お前が早く一人立になってくれて，私も少しは休息を始めたい。私の年に合った，更に私の本来の気質にも合った生活を送れるように，どんなに熱心に祈っているか，わか

らないでしょう。」(1698年5月2日)

と書いている。だから，書簡の多くに現われたあの落着きと抑制とを以て，生活を生きる為には，Racine は生涯の一瞬毎に，自分自身の情念と戦わねばならなかった筈である。この，自分自身の情念との戦を通して，彼は《Andromaque》より《Phèdre》を貫く悲劇の idée,「情念＝運命」を見出したのだが，先に述べた様に，それは又，Racine が，どれ程，精神の不羈を渇望していたかを示すものであった。

ところで，この精神の同じ苦痛と渇望を，後年の Cantiques spirituelles の中にも見出す時，それでは一体，1677年の回心とは，Racine の内面のこのテーマにとって，どんな意味をもたらしたのかと思わずにはいられない。今迄追求して来た Racine の考え方を頭におきながら，Racine 自身の1677年以後の書簡をみて行っても私達は，やっぱり其処に，先ず，人間不信を基とした，巧みな処世術を見ずにはいられないのである。

「(Boileau の兄弟に地位を得させる運動に就いて) 今朝 Maintenon 夫人にお話しし，それについて認(シタタ)めてある手紙を渡しておきました。出来るだけ工夫して，彼女が王に御見せする様にうまく書いたのです。de Chamlay 氏の方は……(中略)，友よ，事態は今こんな具合です。後は神様の御手にあります。多分神が，私達の為に，王の心を動かして下さいましょう。」(1693年5月30日 Boileau 宛)

彼は1677年年5月に，王の史官に任命されて後，6月には結婚して幸福な家庭をつくり，益々深く宮廷に入りこみ，王に従って屢々戦場に観戦している。1690年には gentilhomme du Roi に指命され，一方，この間，Port-Royal の修道院の為に，実際的な，政治的な活動を続けている。

「親しい友よ。貴方がこの館で得ていらっしゃる信用の凡てを使って下さい。」(1692年)

等という大 Arnauld の依頼の手紙や，伯母の Agnès de Sainte Thècle 尼の希望で奔走している Racine の返事の数々が見出される。Racine の興味は，ますます現実に鋭く当てられて，その書簡は宮廷の誰彼の活き活きした描写に満たされているばかりでなく，1692年王に従って，Cateau-Cambresis へ着いた彼は，次の様な手紙を Paris の妻へ送っている。

「麦の値が，とても騰っています。20 sous しかしなかったのが 60 sous もします。Montdidier でもほぼ同じです。貴女の小作は儲けたに違いなく，貴女に充分お金を納められる筈です。安かった時，売急がせなかったのですから。」(1692年5月15日夫人宛)

だから，Racine が神を求めたのが事実だとしても，それは，現実の生活への配慮を捨てる事を少しも意味しないのだという事を，先づ心に留めねばならない。

かって，Antoine Le Maître が回心により神に仕えようと決心した時，彼はそれ迄多くの庇護を受けていた大法官 Séguier に，次の様な手紙を送った。

「……何れに致しましても，閣下，私は神に御仕えして生き，そして死ぬ事のみを願うのでございます。私を滅ぼそうとする世間とは，口頭でも書物でも，もう如何なる交渉をも持たない事のみを，願うのでございます。」

又，Pascal は，

「人はその生涯の残りを，神の御意志に適わせたいと決意する。だが本来の弱さと，今迄浸っていた罪の習慣が，この至福へ至る道を不可能にするので，魂は神に至る方法，神に結ばれる方法，永遠に神を離れぬ方法を，その恩寵に祈るのである。」

と云っている。Pascal にとっても，Le Maître にとっても，回心とは，魂を危険へひき入れる世間に背を向けて，神の御手を求めつつ，神へ向って歩き出す事であった。だが Racine は，正に反対の事をしようとしていたのである。彼は，自分の生きて来たこの情念の世界の真只中に，神の力を見ようと欲したのである。よく生きる為の神，それが Racine の求めた神であった。第一部で，信頼も理性もない情念的存在として人間を捉えつつも，その思いに耐えられなかった Racine を，私達は確認したが，もし神というものがあって，人々の心の中に，善き動きをもたらされるなら，この生は，もっと生き易いものになると，誰が考えないであろうか。Racine の，希望と，それに反する現実の明晰な認識との矛盾を，解決する唯一のもの，それが Racine に於いて求められた，神という観念だったのではなかろうか？ この現実の中で，善と正を信じて，確かりと歩む為に，Racine は神を求めたのだ。

だが，私達は此処で，一つの疑問にぶつかる。一つの善，一つの理想を信じるとは，どういう事だろうか？ それには現実には無いもの，もっと正しく云えば，まだ存在しないものを，意志によって，強い意欲によって，存在させようと努力する事ではないだろうか？ だから理想に従って生きるという事は，多少とも，この生を生き難くし，危険をもたらすものである。何故なら，事物の秩序は，未だその様に存在してはいないのであるから。

Christ が新しい神の愛を説いた時，どれ程の危難と苦痛とが，彼を襲ったかを，私達は誰でも知っている。Rousseau が社会の悪を指弾した時，どれ程，迫害の妄想と，孤独に悩まなければならなかったかを，私達は知っている。だが現実が，その様に存在しないからと云って，私達は，それを望み，それを信じるのを止める事は出来ないのだ。何故なら，私達はそれを愛し，それのみを愛するからなのだ。もしそれが実現しないなら，この生は生きるに値しないからなのだ。だからたとえ，現実が正に反対の事を私達に示し，理想に従った行動の結果として，危険と，恐らく滅亡とを，明かに予告したとしても，私達はやはり，私達の信じるものが存在するかの如く行動しなければならないのだ。何故なら，そうする事によってしか，理想を実現する道はないのであるから。Pascal はこの同じ考えを，見事な言葉で説明している。

「凡て目に見えるものは，神が悪の存在を許して居られる事をしか示さないのでありますから，私達がそれと戦ってなす行動だけが，神の善の証なのであります。」と。

正や善や，一切のよきものが存在するという証は，自分の行動の中にしか，自分の愛の力の中にしかないのである。

こうして，問題は何時も自分自身の中にかえって来る。この現実を巧みに生き乍ら，しかも神を信じようとした時，だから Racine は Pascal や Le Maître が持った以上の精神の力が必要だったのだと云えよう。それを現実の生活に密着し乍ら成就しようとしただ

け，それだけ多くの努力を必要としたのである。こういう意味では，Racine が精神の不羈を希わなかった時はなく，逆に云えば，劇作時代を通じて，生涯，神を求め続けていたとも云えよう。

1698年，王の不寵という怖ろしい試練に際して，Racine の示した惑乱は，彼の信仰にも拘らず，その年になっても猶，彼の中で，情念が彼の全存在を揺がす“運命”だった事を告げている。

然し，書簡を読んで注意をひかれるのは，此処でも又，Racine は，自己自身に就いての観察，いわば覚醒の力を，少しも失っていない事である。

「貴方の御手紙を，あの人達に読んできかせました…尤も私は，読み乍ら，先へ先へと目を走らせて，あんまり Janséniste 過ぎる処がないか見て行ったのです。終りの方に Nicole氏の名前が出て来ましたね，私は思い切って，そこを読みとばしました。或はもっとはっきり言えば卑怯にも。」(1687年9月5日 Boileau 宛)

既にずっとずっと若年の手紙に，

「…けれども，起った事をみんな君に，お報らせすべきかどうか僕には判りません。君には大して興味がないでしょうからね，けれども本当を云うと，僕に起った事は何でも，良い事でも悪い事でも，君と分つ癖がついてしまって，黙っていると，君より僕自身を罰する事になるのです。」(1661年9月 L'abbé le Vasseur 宛)。

更に次の手紙は感情に流されまいと極度に警戒している人の感じ方をよく示すと思われる。即ち，Boileau が Jean-Baptiste を賞めた事に就いて，

「Ses prédictions ne laissèrent pas néanmoins de me faire plaisir et de flatter un peu la tendresse paternelle.」(1698年6月23日 Jean-Baptiste 宛)

この lucidité は，現実をそのまま受入れる人の態度ではない。情念のままに無意識に生きる弱い人間のそれではない。書簡の凡てを通じて各所に見出されるこの自己認識の力は，Racine が作品に於いて主人公に与えた，あの武器を，現実の自分自身との戦いに於いても信じた事を，雄弁に物語っている。情念に打克って行動する事は出来なくても，せめて，胡魔化す事なく自分の位置を凝視めようとした事を示している。Racine は最後まで，それを精神の唯一の力として，情念との戦を生きたのである。

1699年4月，長男の Jean-Baptiste は，漸く任地から，父の枕辺に帰って来ていた。死の二日前，この最愛の息子は医師の保証を繰返して，父を力附けようとした。

「あの人達はそう云うのだ。」と Racine は云った。「だがお前は私の息子だ。私に偽りの希望を抱かせてはならぬ。」

この言葉は，類い稀な明晰な精神の煌めく姿を，一挙に私達の前に照らし出す。《Phèdre》から20年，死を前にして，Racine は猶，情念との烈しい戦を続けねばならなかったにしても，彼の悲劇を築きあげた，あの明晰な意識，自分の状態を胡魔化す事なく凝視めたあの覚醒の力を，私達は，此処に，確認する事が出来るのである。

使用テキスト：Racine, Œuvres complètes (Les Grands Ecrivains) 1870.